

交 流 集 会 4

「医 療 安 全」

KYT の病棟実践におけるエビデンスを考える 試行から報告、そして研究へ

兵藤好美（岡山大学大学院保健学研究科） 企画趣旨・KYTとは
山中廣恵（京都大学医学部附属病院看護部）京大病院の実践から 話題提供
犬飼智子（旭東病院 看護部） 旭東病院の実践から 話題提供
細川京子（山陽学園大学 看護学科） 実施病院の調査から 話題提供
田中共子（岡山大学大学院社会文化科学研究科）総括：KYT 実践と研究
全体質疑・応答

KYTとは、「危険予知訓練」のローマ字書きを略したものである。1973年に日本の鉄鋼業界で始められて以来、製造業、建設業、運輸業、交通分野に広まり、今では医療分野でも使われるに至っている。その目的は、危険を予知・予測する能力を高め、危険に対する感受性を鋭くすることとされており、仮想された状況の危険を言い当てることを基本に、対する安全行動を考えたり、試したりしていく学習の方法を指す。

現場では多様な実践形態が試され、KYT4ラウンド法、個人KYTなど、実施方法のバリエーションが多く見られる。しかしながら、実践しようにも十分な時間がとれない、実践してもチームの協力が得られにくい、あるいはマンネリ化し有名無実になってしまいがち、といった悩みも聞かれる。その原因を考えていくと、次の問題が浮かび上がってくるように思う。KYTによる効果が目に見えない、組織ぐるみの取り組みになっていない、行動変容を起こすための知識と技術が不足している。すなわち、効果測定、安全文化、教育の問題に集約されるのではないか。

本交流集会では、的確な研究遂行を通じてこれらの課題を克服することを目指して、具体的に必要な手続きについて語り合いたい。まずKYTを継続的に実施する病院から実践報告をしていただき、導入から定着レベルの段階毎に、どう取り組みれば質の高い実践が実現できるのか、そしてそこで何が明らかにできれば完成度の高い研究が成立するのかを考える。次に、効果測定と安全文化の醸成について、我々が現在取り組んでいる調査研究と介入実践研究の報告を素材として、研究パラダイムの組み方と研究上の課題に関する議論を深めたい。量と質のデータを使った統合研究で、安全文化の尺度化はどこまで可能なのか、準拠理論の試用や説明モデルの提案にどのような可能性が考えられるのかを議論する。

こうして、実証を示すという形で研究上の問いを解き、研究によって看護の質を上げていく方向性を共有しようと考えている。本交流集会が、病院の医療安全管理者をはじめ、医療安全に関心のある方々の活発な意見交換の場となることを期待している。

【科学研究費補助金：基盤研究（B）「病棟の安全文化醸造に向けたKYT介入実践研究パラダイムの複合的展開」H21-25（代表：兵藤好美）の助成を受けて、研究中である】

連 絡 先 兵藤好美：hyodo@md.okayama-u.ac.jp
田中共子：tomo@cc.okayama-u.ac.jp

関連資料 URL：kango.okadai.net/